

朝日講座 知の冒険 「媒介／メディアのつくる世界」
第3回 「メディアの相互作用：文学と映画をめぐって」 野崎敏

はじめに：「表現」の欲求はどこから来るのか

ラスコーの壁画（図参照）、洞窟内の動物群像：形態の模倣＝representation, mimesis

ジョルジュ・バタイユ『ラスコーの壁画』（出口裕弘訳、二見書房、1975年）：

「最古の芸術」「芸術の生誕」「ラスコーの奇蹟」（p12） 15,000年前のクロマニヨン人による

「芸術作品がどれほど深く、人間そのものの形成に結びついているか」（p13）

「現存の感覚が、これほど優しく、またこれほど動物と野生の放つ熱気に充ちて君臨することは二度とないだろう」（p122）「写実的な仕上がり」（p155）「知的リアリズムという名称がふさわしいような実在の形象化の産物」（pp156-157）「驚くべき完成度に達していた自然主義的手法」（p157）……ラスコーの洞窟、史上最古の映画館？ 視覚的体験の根源性

1. リアリズムへの道：「現実そのもの」への欲求、不死への欲求？

アンドレ・バザン「写真映像の存在論」（『映画とは何か』上、野崎敏・大原宣久・谷本道昭訳、岩波文庫、2015年）：写真によって初めてもたらされたリアリズムの意味

人間の不在、「信じること」の可能性

写真の逆説：非媒介的な媒介、非メディアの本質をもつメディア＝視覚的再現の信憑性

ところがそれゆえに「作家」を生み出す：映画史の逆説、物語への傾斜 Narrative Film

2. 文学と映画：映画による文学の「書き直し」、脚色、アダプテーション（文芸映画）

映画以前からの人間的欲望：反復への意志、翻訳への欲望

イメージの増殖、複数化のプロセス *図版参照

例1 川端康成『伊豆の踊子』1926年

「踊子は十七くらいに見えた。私には分からない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵型の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった」（新潮文庫、9ページ）

例2 アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』1731年（53年改訂版）

「彼女があまりに魅力的に見えたので、それまで男女の性の違いなど考えたこともなく、若い娘に少しの注意も払ったことがなかった私なのに、そしてだれからも賢さと自制心を褒められていた私なのに、たちまちのうちに恋の炎を燃え上がらせ、我を忘れてしまったのです。」（拙訳） *図版参照

表紙、挿絵：「書物」のうちなる複合メディア的戦略

3. 映画というメディア＝巨大な翻訳マシン：翻訳とは原作に「死後の生」を与える仕事、「生あるものの変容と新生」を作り出す仕事である（ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」内村博信訳、『ベンヤミン・コレクション2 エッセイの思想』浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1996年、391ページおよび395ページ）

映画による文学の更新と「世界文学」化

4. 「忠実さ」の不可能性：映画化の2つの力学——見えないものの可視化／見えるものの非視覚化→フレームの内と外（空間的切断）、長回しとモンタージュ（時間的切断）

例3 『山椒大夫』

「安寿は泉の畔に立って、並木の松に隠れてはまた現れる後影を小さくなるまで見送った。そして日は漸く午に近づくのに、山に登ろうともしない。幸いにきょうはこの方角の山で木を樵(こ)る人がないと見えて、坂道に立って時を過ごす安寿を見咎めるものもなかった。／後に同胞(はらから)を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さい藁履(わらぐつ)を一足拾った。それは安寿の履であった。」森鷗外「山椒大夫」1915年(『森鷗外全集5』ちくま文庫、1995年、184ページ)。

→溝口健二による映画化『山椒大夫』(1954年)。行間をどう可視化、ドラマ化するか。文体をいかに再創造するか。諸要素の取捨選択、原作のもつ可能性の掘り起し。

5. 新旧メディアの相関関係：小説に対する映画の影響、文体の変容

「我々は林を抜けてICUのキャンパスまで歩き、いつものようにラウンジに座ってホットドッグをかじった。午後の二時で、ラウンジのテレビには三島由紀夫の姿が何度も何度も繰り返し映し出されていた。ヴォリュームが故障していたせいで、音声は殆ど聞きとれなかったが、どちらにしてもそれは我々にとってはどうでもいいことだった。我々はホットドッグを食べてしまうと、もう一杯ずつコーヒーを飲んだ。一人の学生が椅子に乗ってヴォリュームのつまみをしばらくいじっていたが、あきらめて椅子から下りるとどこかに消えた。／『君が欲しいな』と僕は言った。」村上春樹『羊をめぐる冒険』(講談社文庫、上、1985年、21ページ)

Cf. カルヴィーノ『アメリカ講義 新たな千年紀のための六つのメモ』米川・和田訳、岩波文庫、2011年
「これからの文学に必要なもの——それは「軽さ」「速さ」「正確さ」「視覚性」「多様性」である」：映画の先駆としての小説、小説の未来形としての映画

6. 映画への愛、文学への愛

「それら[=自分の若い頃に見た映画]は、質の良し悪しを問わず、はたまた、世評のいかんにかかわらず、彼の生の奥深い部分の——それも、おそらく、もっとも伝えがたい秘密の部分の——一部となってしまっていたのだから。」ロジェ・グルニエ『シネロマン』(塩瀬宏訳、白水社、1977年、326ページ)

「あのころは映画といえば／日本映画だった。」溝口監督の『雨月物語』(1953年)とともに「映画が芸術であることを、私ははじめて理解した。」「(……)私の精神は夢でも見たように、あるいは証言できないできごとと立ち会いでもしたかのように眩惑された。」「この映画を見直すたびに、最初の数コマから、いや冒頭の字幕からして、魅惑に取り憑かれる。」「源十郎、宮木、藤兵衛、阿浜の暮らす荒涼とした谷間を開く映像を前にしたときに、最初に自分が気づいたことを覚えている。そのとき私は、ああした人々が日本人であることを、彼らが別の言語を話し、別の暮らし方をしていることを忘れていた。私は彼らの世界のなかにいた。私が彼らに所属するように、彼らも私の一部を成していた。彼らの生きる幻想は私の日常になっていた」ル・クレジオ『ル・クレジオ、映画を語る』(中地義和訳、河出書房新社、2012年、63、65、66、78ページ)

7. 結論

メディアは互いに反響しあい、「物語」に第二、第三の生を与える
メディアは互いに映しあいながら、自らの新たな可能性を探り続ける
文化の創造は、メディアの相関関係の形作る渦巻きによって可能となる